

『源氏物語』の和歌を読む（九）

加藤 睦

*

またの日、「宣旨書きは見知らずなん」とて、

「いぶせくも心にものをなやむかなやよいかにと問ふ人もなみ言ひがたみ」と、この度は、いといたうなよびたる薄様に、いとうつくしげに書きたまへり。若き人のめでざらむも、いとあまり埋もれいたからむ、めでたしとは見れど、なずらひならぬ身のほどのいみじうかひなければ、なかなか、世にあるものと尋ね知りたまふにつけて涙ぐまれて、さらに例の動なきを、せめて言はれて、浅からずしめたる紫の紙に、墨つき濃く薄く紛らはして、

思ふらん心のほどややよいかにまだ見ぬ人の聞きかなやまむ

（明石巻）^{〔1〕}

右の光源氏と明石君の和歌の贈答において、源氏から贈られた「いぶせくも…」という求愛の歌を見て、明石君は自らの「なづらひな

らぬ身のほど」を改めて顧みて涙ぐむ。その明石君が周りから「せめて言はれて」返歌をした、「思ふらん…」の歌について、諸注は次のように解釈している。

・私を御覧になつた事のないあなたが、噂だけでお悩みになる筈はないからお心の程は怪しい物です。 （全書）

・（私（娘）を、恋しく思つて、お悩みなさるような）御身（源氏）の御心の程は、やあ（まあ）、どうなのでござりましょうか、（私は疑わしく思います。源氏の君ともあろう方が）まだ、御覧なされない私（娘―明石上）などの風聞（噂）に、お悩みなさるのでござりましょうか。（そんな事は無いはずである）と私は思います。） （大系）

・あなたは、心の中で悶え苦しむと仰せになります、私をまだ御存じないあなたが噂だけでお悩みになる事がございましょうか（変ですこと）。 （玉上評釈）

・私を思つて下さるといふあなた様の心の深さのほどは、さて、

どの程度なのでしょう、まだ私を見たこともない人が噂だけで悩むということがあるものなのでしょうか。 (集成)

・私のことを思っているというあなたの心の深さは、はてはどの程度であろう。まだ私に会ったこともない人が、噂だけを聞いて心を悩ましたりするものだろうか。 (新大系)

・お思いくださるといふあなた様のお心のほどは、さてどれくらい深くいらっしゃるのでしょうか。この私をまだごらんになったことのないお方が、噂だけでお悩みになるものなのでしょうか。 (新編全集)

通覧してわかるように、諸注の解釈はおおむね一致しているが、第四句の「まだ見ぬ人」については理解が分かれていて、大系が、「(あなたが) まだ、御覧なさらぬ私」というように、「人||明石君」という理解を示すのに対し、他の諸注は、「私をまだ御存じないあなた」(玉上評釈) というように「人||源氏」と理解している。

この、「まだ見ぬ人の」という表現については、大系が「まだ見ぬ人(明石君)の風聞に、源氏が悩む」というように、修飾語として「聞きかなやまむ」にかかるものと解するのには無理があり、他の諸注が、末の句「聞きかなやまむ」の主語として理解しているのに従うべきである。

下の句の構文を右のように主語述語関係にあると理解した上で、改めて問題としたいのは、諸注が一致して、末句の「聞きかなやま

む」を、「噂だけを聞いて心を悩ましたりするものだろうか」(新大系)、「噂だけでお悩みになる筈はない」(全書) というように、反語の意と解していることである。

「聞きかなやまむ」が、このような反語の意味を表していると考えれば、その前提として、男が女の噂を聞くだけで心を悩ますはずなどない、という常識が存在しなければならぬ。けれども、平安時代の恋歌において、男が女の「噂を聞くだけで」恋をし、「心を悩ます」ことは、決して奇異なことではない。それは、例えば『古今集』中の次の用例を見れば明らかであろう。

・おとにのみきくの白露よるはおきてひるは思ひにあへずけぬべし

(恋一・四七〇・素性法師・「題しらず」)

・おとは山おとにききつつ相坂の関のこなたに年をふるかな

(恋一・四七三・在原元方・「題しらず」)

・世中はかくこそ有りけれ吹く風のめに見ぬ人もこひしかりけり

(恋一・四七五・つらゆき・「題しらず」)

・逢ふ事はくもるはるかになる神のおとにききつつこひ渡るかな

(恋一・四八二・つらゆき・「題しらず」)

したがって、「思ふらん…」詠の「まだ見ぬ人の聞きかなやまむ」という表現が、疑問から自動的に反転して「聞きかなやまむはずはない」という否定的認識を意味していると、歌を受け取った源氏、ひいては同時代読者が読み取りうるような恋の常識は、当時において存在しなかったものと判断される。

当該歌で、明石君は、源氏から示された愛の深さを疑っている。

それはなぜだったのだろうか。「思ふらん…」詠を書きつける前に、明石君は、源氏からの文を見て、次のように嘆いていた。

めでたしとは見れど、なずらひならぬ身のほどのいみじうかひ
なければ、なかなか、世にあるものと尋ね知りたまふにつけて
涙ぐまれて、……

ここでの嘆きは、高貴な源氏に対して自分がひどく不釣り合いな存在であることをめぐつての嘆きである。そして同じような思いは、明石巻の他の箇所においても、

いと恥づかしげなる御文のさまに、さし出でむ手つきも恥づか
しうつつまじう、人の御ほどわが身のほど思ふにこよなくて、
心地あしとて寄り臥しぬ。

・人数にも思されざらんものゆゑ、我はいみじきもの思ひをや添
へん、……
というように記されている。

さらに、明石君は、源氏が通うようになった後、足が遠のきがち
になった現実を受けて、

女、思ひしもしるきに、今ぞまことに身も投げつべき心地する。
と絶望することになるが、ここで「思ひし」と想起されているのは、
先に引用した箇所にもられる、彼我の身の程の懸隔から導かれる将
来への懸念、悲観であった。

当該歌「思ふらん…」を解釈する際には、右に確認したような明

石君の心理を十分に参照することが必要である。そもそも下の句「ま
だ見ぬ人の聞きかなやまむ」は、そのまま理解すれば、「まだ私を
見ない人が（噂を）聞いて思い悩むのだろうか」という意味になる
が、詠歌の際の明石君の心境を考えれば、このような文字通りの解
釈で十分であり、特に言葉を補って反語の意味に解釈する必要はな
いはずである。明石君は、源氏が噂を聞いただけで心を悩ませてい
るはずなどないと疑ったのではなく、噂を聞いただけで心を悩ませ
ているにすぎないのだろうと言っているのである。

先ほど『古今集』の用例で見たような、男が女の噂を聞いただけ
で恋をするという習俗は、男の思いが成就した後には男が女を顧みな
くなるという展開を、時に招くこととなった。

『竹取物語』の中で、かぐや姫は、自分のことを「音に聞きめで
まど」ひ、粘り強く求愛しつづける貴人たちについて、

よくもあらぬかたちを、深き心も知らで、あだ心つきなば、後
くやしきこともあるべきを、と思ふばかりなり。世のかしこき
人なりとも、深き心ざしを知らでは、あひがたしとなむ思ふ。
という考え方を竹取翁に述べている。ここでかぐや姫は、噂だけで
自分に恋をしている男と結婚した後には、姫の「よくもあらぬかたち」
を知られて見限られ、結婚を後悔するのではないかという考えを示
している。

先に見た明石君の懸念や、当該歌に込められた悲観的な思いも、
基本的にかくや姫のそれとあい似たものであることが知られよう。

明石君は、自分がひどく劣っていて、到底源氏に愛される存在ではないという意識のもとに、源氏から「世にあるものと尋ね知」られたことを嘆いていた。

当該歌の「まだ見ぬ人の聞きかなやまむ」は、噂でしか自分のことを知らない源氏が、自分について過剰な期待を抱いているかもしれない、いったん逢瀬を遂げた後には、幻滅して自分を見限るのだから、そうに違いないという懸念を内包しており、その懸念が、上の句の「思ふらん心のほどややよいかに」という、源氏の心ざしへの疑いにつながっているのである。

*

……まことに神のよろこびたまふべきことをし尽くして、来し方の御願にもうち添へ、ありがたきまで遊びののしり明かしたまふ。惟光やうの人は、心の中に神の御徳をあはれにめでたしと思ふ。あからさまに立ち出でたまへるにさぶらひて、聞こえ出でたり。

住吉のまつこそものは悲しけれ神代のことをかけて思へばげに、と思し出でて、

「あらかりし波のまよひに住吉の神をばかけてわすれやはするしるしありな」とのたまふいとめでたし。
(濔標卷)

明石から帰京した後、源氏が住吉の神に願ほどきのために参詣した折に交わされた、惟光と源氏との贈答歌のうち、源氏の返した「あ

らかりし……」詠について、本居宣長『源氏物語玉の小櫛』は、次のように述べている。

初二句は、かの風雨雷の変の事也。孟津に、悪後の心むけ云々はわろし。さて此歌、二の句の下に、詞たらず、意をふくめて見べし。

新編全集は、この記述を引きながら、その頭注において、

第二句の下に「詞たらず、意をふくめてみるべし」とする『玉の小櫛』の説を受けて、助かったので、ぐらいを補う解が多い。と記して、「波のまよひに」という句の解釈について補足している。

諸注は、その部分について、次のように解釈している。

・須磨で遭つた荒浪の騒ぎにも、お助け下さつた住吉の神を忘れようか。
(全書)

・荒かつた須磨の波の混乱(騒ぎ)に助かつて、無事であつた事を考えると、住吉の神をば心に浮べ(かけ)て、私(源氏)は忘れる事をまあするか、しない(忘れない)。住吉の神は靈験があるなあ。
(大系)

・あの恐ろしかった(須磨の)波風に苦勞して、住吉の御神徳を忘れようか。いついつまでも忘れはせぬ。
(玉上評釈)

・激しかった波風の騒ぎを思うにつけ、住吉の神の御徳をいささかなりとも忘れたりしようか。
(集成)

・須磨での海難を思うにつけても、住吉の神の神慮は決して忘れはしない。
(新大系)

・恐ろしかった須磨の波風、あのころの苦境を思うにつけても、住吉の神のことはけっして忘れられまい。
(新編全集)

このように諸注は、細部に異同はあるものの、かつての須磨の波風を思い起こし、助けてもらったことを考えると、住吉の神を忘れはしない、という意味を、当該歌から読み取っている。

宣長が「二の句の下に、詞たらず、意をふくめて見べし」と注意するのは、「に」という格助詞でつながれている初二句と三句以下の関係に、歌の表現のままでは把握しにくいものを感じているからであろう。新編全集が補足するように、諸注の解釈には、はっきりそう記されていない場合も含めて、「助かったので」というニュアンスが含まれているといつてよい。

ところで、のように解釈されるとおりに、源氏が「あらかりし」詠において、「住吉の神に救ってもらったことを思うと、その徳を忘れることはない」という気持ちで詠じたのだとすれば、その和歌はいささか功利的で不遜な響きを伴わないであろうか。

そもそも源氏にとって、住吉明神の徳を信ずる旨の和歌を詠ずるにあたり、反語の構文により結果的に打ち消されるにしても、一度は「住吉の神を忘れる」ことに触れるのは、それほど自然なことあるいは穏当なことではなかったであろう。

次の用例から分かるように、「忘れやはする」という反語の言い方は、何らかの意味で忘れることが起きうるといふ条件のもとに、機能するからである。

・よそひとになりはてぬとやおもふらんうらむるからにわすれやはする

(後拾遺集・恋三・七四三・前律師慶暹・「かたらひはべりけるわらはのこと人におもひつきにければひさしうおももせではべりけるに、さすがにおぼえければよみてつかはしける」)

・うぐひすは花のみやこもたびなればたにのふるすをわすれやはする

(詞花集・恋下・二六〇・大僧正行尊・「かへし、わらにはかはりて」)

・おやもこもつねのわかれのかなしきはながらへゆけどわすれやはする

(実方集・四六・「ほどへて、なにはへゆく道にて、ながらのはしにて」)

・いそのかみむすびおきてしもとゆひはふるきながらにわすれやはする

(輔親集・一七七・「とあるかへし」)

もひなる人に」)

・やまかぜにちりのまがひのはなのまもうつるふ人をわすれやはする

(範宗集・六一七・「建保四年仙洞百首内 恋十五首」)

「よそひとに」詠では、相手と絶縁状態にあったことを踏まえ、

「うぐひすは：」詠は、花の都に移った鶯が谷の古巢を忘れかねないということを念頭において、そうした状態でも忘れたりはしない、という気持ちを詠じている。「おやもこも：」詠では、「ながらへゆけど」、「いそのかみ：」詠では、「ふるきながらに」が、忘れることを誘発する状態として示されている。後の二首では、「さだめなくしぐるる雲の行きき」「やまかせにちりのまがひのはな」が、「そなたの空」「うつろふ人」を詠者に忘れさせるかもしれない条件にあたる。

翻つて、当該歌を顧みるに、この歌で、「忘れる」ことを起こさせるかもしれないこととして詠みこまれているのは、何だろうか。それは、「まよひ」であるに違いない。『日本国語大辞典 第二版』によれば、「まよひ」の語義は、左記のごとくである。(平安時代あるいはそれ以前の用例があるものに絞る。)

- (1) 布が古び、すれて薄くなったため、織糸が片寄ること。
- (2) 髪や糸筋などが、もつれ乱れていること。
- (3) 物がまぎれて、区別がつかぬこと。目標を定めかねるようなさまであること。

(4) ちこち入り乱れて移り動くこと。右往左往すること。また、騒ぎ。人の混雑。

(5) 心が煩惱に乱されて悟りえないこと。

このように定義される「まよひ」が、何かを忘れることの誘因となるのは、十分ありうることである。諸注は、「あらかりし波のま

よひ」を、「須磨の波の混乱(騒ぎ)に助かつて、無事であった事を考えると」(大系) というように、後々までも神の徳を忘れないことを促す要素として捉えているが、そうではなく、源氏の心を乱し神の徳を忘れることを誘発するものとして詠まれていると解するのが正しいであろう。

- ・ 一こゑはおもひぞあへぬほととぎすたそかれ時の雲のまよひに
(新古今集・夏・二〇八・八条院高倉「時鳥をよめる」)
- ・ かへるさのみちこそしらねさくら花ちりのまよひにけふはくらしつ

(新勅撰集・春下・一〇四・大納言定通・「建暦二年、大内の花のもとにて三首歌つかうまつりけるに」)

- ・ うぐひすのつげしふるすやわすれぬるかへればかはる雲のまよひに
(詠十首和歌・三七・権律師隆昭・「溪雲」)

右の用例においても、「まよひ」は、詠者の心を乱すものとして詠まれており、「うぐひすの：」詠では、「まよひ」が「忘れる」ことにつながるものとして関係づけられている。

- ・ わするなよきりのまよひにひとよねてせきこぎいづるすまのとも舟
(秋篠月清集・一一三五・「関路曉霞」)

- ・ わすれずよほのぼの人をみしま江のたそかれなりしあしのまよひに
(秋篠月清集・三五三・「見恋」)

右の二首では、「まよひ」が、忘れることを誘いうるということを前提として、「忘れるな」「忘れない」と詠んでいる。

忘ればや花にたちまよふ春霞それかとばかりみえし明ほの

(拾遺愚草・二五三六・「おなじとし九月十三夜、水無瀬

殿恋十五首歌合に、春恋)

この歌では、「立ちまよふ春霞」の中に「それかとばかりみえし」花によそえられている女の姿を、霞が「たちまよふ」中にあったにも関わらず忘れられず、何とかそれを忘れて苦しみから逃れたいということを詠んでいる。

源氏は、須磨の悪天候に襲われた時、住吉の神に次のように祈っていた。

君は御心を静めて、何ばかりの過ちにてかこの渚に命をばきはめんと強う思しなせど、いともの騒がしければ、いろいろの幣帛捧げさせたまひて、「住吉の神、近き境を鎮め護りたまふ。まことに迹を垂れたまふ神ならば助けたまへ」と、多くの大願を立てたまふ。

(明石巻)

当該歌の表現に即していえば、源氏は荒波に見舞われながらも、その「まよひ」によって住吉の神の徳を忘れることなく、大願をたてて祈りを捧げたことになる。

先にも記したように、諸注の解釈に従えば、源氏は須磨の浦で受けた恩恵故に、住吉の徳をいつまでも忘れたりほしくないという、功利的ともいえる歌を詠んだことになるが、そうではなく、過去においても未来においても、片時も住吉の神を忘れたりほしくないという、変わらぬ志を、須磨の荒波に見舞われた際にも祈りを捧げたことを

引き合いにして、詠んで見せたのである。

*

姫宮も、いかにしつることぞ、もしおろかなる心ものしたまはばと胸つぶれて心苦しければ、すべて、うちあはぬ人々のさかしら憎しと思す。さまざま思ひたまふに、御文あり。例よりはうれしとおぼえたまふも、かつはあやし。秋のけしきも知らず顔に、青き枝の、片枝いと濃くもみぢたるを、

おなじ枝を分きてそめける山姫にいづれか深き色とはばやさばかり恨みつる気色も、言少ななことそぎて、おしつみたまへるを、そこはかともなくもてなしてやみなむとなめりと見たまふも、心騒ぎて見る。かしがましく、「御返り」と言へば、「聞こえたまへ」と譲らむもうたておぼえて、さすがに書きにくく思ひ乱れたまふ。山姫の染むる心は分かねどもうつろふ方や深きなるらんことなしびに書きたまへるが、をかしく見えければ、なほ怨じはつまじくおぼゆ。

(総角巻)

弁の導きで、薫は大君の寝室に忍び込んだものの、その大君には逃げられ、同じ寝室に眠っていた中君と実事なしの一夜を過ごすこととなった。その薫が、翌日大君に贈った「おなじ枝を…」の和歌について、諸注は次のように解釈している。

・同じ枝を特に分けて染めた山姫に、青と紅とどちらが深い色か

きいてみたい。思ひそめたあなたと、さうでない中君と私には
どちらが大切な方でせうの意。

(全書)

・同じ木の枝を、一部だけ区別して紅く染めているのであった山
姫に、染めない青葉と染めた紅葉と、どちらが濃い色かと質問
したい。(姉妹の中、中君を取り分けて私に譲ったのであった

(染めける)大君(山姫)に、大君と中君とどちらが深く私の
思い初(染)めている色(方)であるのかを問いたい。私は、
大君を深く思っているのである。

(大系)

・同じ一本の枝を区別して染めた山姫に、どちらが深い色かと問
いたいもの。

(玉上評釈)

・同じ枝を、片方だけ特別に紅に染めた山姫に、どちらが深い色
か尋ねたいものです。わざわざ染めた紅の方が深いと答えるに
決っていきましょう。私の心も、思い染めたお方にと決っている
のです。

(集成)

・同じ枝を片方だけ特別染め分けた山姫に、どちらが深い色か尋
ねたい―わざわざ染めた方が色濃いにきまっている、の意。「お
なじ枝」は姉妹。「山姫」は山の女神で、大君のこと。自分の
心は大君思慕に染まっているとする。

(新大系)

・同じ枝の一方を紅に染め分けた山姫に、どちらのほうが深い色
なのかとお尋ねしたいのです。

(新編全集)

右のように、諸注は、紅葉した枝のほうを大君の比喩、青いまま
の枝のほうを中君の比喩と解し、この歌が示す問いかけに詠者自身

が想定している回答として、葉の色そのものについては、紅葉した
枝の方が「色濃いにきまっている」(新大系)という答えを読み取
り、そこに込められた薫の心については、「思ひ染めたお方(大君)
にと決まっている」(集成)という答えを読み取っている。(玉上評
釈のみ、文字通りの現代語訳を行っているが、このあと引用する文
章によって同様の理解を行っていることが確認される。)

確かに、薫の贈った枝の様子は、「秋のけしきも知らず顔に、青
き枝の、片枝いと濃くもみぢたるを」と記されていて、「いと濃く
もみぢたる」枝の方が「深き色」であることは、自明のことのよう
に思われるかもしれない。

玉上評釈は、この枝について、次のように述べている。

今は秋である。仲秋、八月である。その秋に「深き色」とは「濃
くもみぢたる」葉の方をさすことは明らかだ。そのわかりきつ
た事を、あえて薫は問いかけてみせる。答は一つ、今さらいう
までもない決まりきった事というつもりである。私の気持はあ
なたに深くそまっているということだけ。

しかし、本当に薫は、「わかりきった事を、あえて問いかけてみ
せ」たのだろうか。もしそうなら、そのこと自体が曲のない行為と
いわざるをえないし、さらに大君が、返歌「山姫の…」で、「うつ
ろふ方や深きなるらん」と答えたことが、薫の贈歌の含意をそのま
ま鸚鵡返しに返したことになる。語り手がわざわざその返
歌について「ことなしびに」と記して、大君が薫の思いをばくらか

したことをほめかした意味も、了解しにくくなるだろう。

私見によれば、青いままの枝と、濃く紅葉した枝の、どちらが「深き色」であるかは、諸注が決めつけるほど自明なことではない。

「青」（＝緑）もまた、それを「深い」と表現した用例は、いくつも見出すことができる。

・ふか緑ときはの松の影にゐてうつろふ花をよそにこそ見れ

（後撰集・春上・四二・坂上是則・「松のもとにこれかれ侍りて花をみやりて」）

・あさまだきわがうちこゆるたつた山ふかくもみゆる松のみどり
か
（人丸集・二三八・「かうち」）

・春の色はまだあさけれどかねてより緑ふかくも染めてけるかな
（貫之集・一二七・「子日の松のもとに人人いたりあそぶ」）

・夏の日のふりしもとけぬ村雨に草の緑をふかくそむらん

（公任集・六五・ためもと）
・年をへて思ひそめたり片岡の松の緑は色深く見ゆ
（住吉物語・少将）

さらに、「ふか緑……」詠に見られるように、緑の葉は、移ろうものとの対比において、「移ろわないもの・変わらないもの」という意味を帯びることも注意すべきである。

・うつろはぬときはの山のさかきをりいのるころをかみもしる
らん
（能宣集・三九五・「又」）

・うつろはで行末遠き松のえは初秋かぜを何とかはきく

（公任集・三四六・「御返し」）

・高砂の松といひつつ年をへてかはらぬ色ときかばたのみむ

（後撰集・恋五・八六四・「かくしつ世をやつくさんたかさごのといふ事をいひつかはしたりければ、女のもとにとこ」）

・松山はかはらぬ色したかければ浪こすことをまだきかぬかな

（清慎公集・六二・「うたがひたまひける事のありければ」）
・かみまひしをとめにいかでさかきばのかはらぬいろとしらせて
しかな

（実方集・八四・「おなじところの少将のおもと、五節のま

ひひめして返りたるに」）

思いがけず中君と一夜を過ごすことになった薫は、中君に心ひかれながらも、次のように自制を貫いた。

……これをもよそのものとはえ思ひはつまじけれど、なほ本意の違はむ口惜しくて、うちつけに浅かりけりともおぼえたてまつらじ、この一ふしはなほ過ぐして、……

ここに記された薫の「うちつけに浅かりけりともおぼえたてまつらじ」という心理について、新編全集は、

中の君を、ここでわがものとすれば、大君から、薫の愛情も容易に妹に心を移す程度の浅さだったと思われるだろうから、それは避けたい、の意。

と、適切に解説している。

以上のように、薫は、中君に心を移すことを、自分の大君に対する愛情が浅かったことを示す行為と考えていた。これは、薫が大君に贈った枝でいえば、移ろった枝、すなわち、「片枝いと濃くもみぢたる」枝に当てはまる。これに対し、移ろわない枝、すなわち「青き枝」は、一途に大君を思い続ける深い愛情に当てはまる。中君と共に寝することなく一夜を過ごした自分の思いを、大君にわかつてほしくて、薫は、双方の枝のどちらが深い色なのかを山姫に尋ねたい、あなたは山姫がどう答えると思うかと、大君に詠み贈ったのである。大君はその含意を直ちに察知したに違いない。けれども彼女はその薫の気持ちをはぐらかし、移ろう枝のほうが深い色なのでしようと、枝そのものについての当たり前のことを、「ことなしびに」返歌したのである。

*

月たちて、今日ぞ渡らましと思ひ出でたまふ日の夕暮、いとものあはれなり。御前近き橘の香のなつかしきに、ほととぎすの二声ばかり鳴きてわたる。「宿に通はば」と独りごちたまふも飽かねば、北の宮に、ここに渡りたまふ日なりければ、橘を折らせて聞こえたまふ。

忍びねや君もなくらむかひもなき死出の田長に心かよはば

宮は、女君の御さまのいとよく似たるを、いとあはれと思ひて、二ところながめたまふをりなりけり。気色ある文かなと見たまひて、

「橘のかをるあたりはほととぎす心してこそなくべかりけれわづらはし」と書きたまふ。
(蜻蛉卷)

浮舟失踪の後、彼女が亡くなったものと思つて嘆く薫は、匂宮に「忍びねや…」の歌を贈る。その歌について、諸注は次のように解釈を行っている。

・貴女も私と同様声を忍んで泣いてをられるでせうね。歎いてもかひのない故人（浮舟）を思ひ出されるならば。
(全書)

・四月の、忍び音に鳴く時鳥のように、御身も忍び泣きをしているであろうか。泣いても甲斐なく、はかなく死んで行った者（浮舟）に、もし同情の気持が通うならば。「死出の田長」は、冥途の鳥と言われる俗説により、死者の意とした。
(大系)

・忍び泣きにあなたも泣いておいでのごとでしょう。泣いても何にもならない死出の田おさのかの人をお思いなら。(玉上評釈)

・忍び音に時鳥が鳴いていきましたが、あなたも声を忍んでお泣きでしよう。もはやかきもない亡き人（浮舟）に心をお寄せなれば。「死出の田長」は、時鳥の異名。浮舟によそえる。(集成)
・ほととぎす同様あなたも忍び音をもらして泣いていることであろう、嘆いても仕方のない亡き浮舟のことを思っているならば。
(新大系)

・この私と同じようにあなたも忍び泣きに泣いていらつしやるのでしよう。嘆いてみてもかきのない死出の田長―亡き人に心を通わせておいでになるのですたら。
(新編全集)

この歌が文字通り意味するところは、「あなたも忍び音に泣いて
いるだろうか。死出の田長(＝郭公)に心が通うならば」というも
のであるが、諸注はそれぞれ言葉を補って内容の具体化をはかって
いる。その解釈は一樣ではないが、

①「も」の理解。

②「死出の田長」の理解。

③「心かよふ」の理解。

の三点において整理や修正を加える必要があるものと考ええる。

まず、「あなたも」という表現が、何を前提として「も」と言っ
ているのかについては、次のように解釈が分かれている。

・貴女(＝中君)も私と同様

(全書)

・私と同じようにあなた(＝匂宮)も

(新編全集など)

・ほととぎす同様あなたも

(新大系など)

この歌の前の叙述において、薫は、「ほととぎすの二声ばかり鳴
きてわたる」声を耳にしている。こういう情景描写から詠歌に至る
文脈の中で読者が読み取る「君も」の意味として最も自然なのは、
「死出の田長(＝郭公)と同様にあなたも」という理解であろう。

匂宮は、薫が聞いた郭公の鳴き声を直接知らないが、同じ一首の中
に「死出の田長(＝郭公)」が詠み込まれていて、「忍びねや君もな
くらむ」と言われれば、「郭公と同様忍び音にあなたも泣いている
だろうか」という意味を了解したと考えるのが妥当である。

次に「死出の田長」であるが、先の引用に明らかのように、諸注

は一致して、「死出の田長」を、亡き浮舟を寓意するものとして読
解している。けれども、たとえば大系が「死出の田長」は、冥途
の鳥と言われる俗説により、死者の意とした」というように示す理
解は、用例から帰納されたものではなく、一首の意味を整合的に解
釈しようとしたための推測にとどまると言わざるをえない。

薫が歌の前文においてその一節を口にした、

なき人のやどにかよはば郭公かけてねにのみなくとつげなむ

(古今集・哀傷歌・八五五・よみ人しらず・「題しらず」)

では、郭公は「なき人のやどにかよふ」存在であり、同じように死
後の世界と郭公を結び付けて詠んだ、

しでの山こえてきつらん郭公こひしき人のうへかたらなん

(拾遺集・哀傷・一三〇七・伊勢・「うみたてまつりたりけ

るみこのなくなりての又のとし、郭公をききて」)

でも、郭公はやはり、死者その人を寓意してはいない。

・なき人をしのぶる宵のむら雨に濡れてや来つる山ほととぎす

・ほととぎす君につてなんふるさとの花橘は今ぞさかりと

右の二首は、幻巻で光源氏が亡き紫上を偲んで詠んだ歌であるが、

郭公はここでも、死後の世界とつながる鳥として詠まれてはいるが、

死者そのものではない。

最後に「心かよふ」について。諸注は、「死出の田長」＝浮舟と
いう理解に連動して、「心かよふ」という表現を、「思い出される」

「心をお寄せになる」「心を通わせておいでになる」というように、

句宮の亡き浮舟を偲ぶ気持ちを表したものと解している。

けれども、この表現は、「心を同じくする・心が通底する」という意に解するべきである。

・人こふる心は秋にかよへばやそらもたも共にしぐるる

(古今六帖・五〇二・つらゆき・「しぐれ」)

・御祓つつおもふ心は此川の底の深さにかよふべらなり

(貫之集・四〇三・「六月はらへ」)

・わかるれば心もそらにかよへばやそでにしぐれのひまなかるらむ

(大斎院前御集・二四一・「つごもりの日、宰相のまかづ

れば、馬、しぐれなどすれば」)

右の歌で、「心…かよふ」という表現は、詠者の心が「秋」「川の底の深さ」「そら」に通底することを意味し、それが「そらもたもとも共にしぐるる」「御祓つつ(深く)おもふ」「そでにしぐれのひまなかるらむ」という現象と関連づけられている。

当該歌の「心かよふ」も、句宮の心が死出の田長(郭公)の心に通底していることを意味する表現であり、「もしあなたの心が郭公の心に通い合うならば、あなたも郭公と同様に忍び音で泣いているのでしょうか」という理路を構成しているのである。

そうした理解の前提となる、郭公の心を、薫がどのようなものと思定しているのかについては、当該歌には明示されておらず、死出の田長の用例からも把握しきれないあいまいさが残るが、郭公に心が通い合うものと薫が推し量ってみせている句宮の心情が、亡き浮

舟を偲ぶ気持ちであることは確実であり、そこから遡行して、郭公もまた、亡き人を偲んで鳴いてもかいたがないのに、忍び音に鳴いている鳥として捉えられているものと考えてよいであろう。そして薫自身もまた、郭公の鳴く声に、自分の悲しい心を重ね合わせていたに違いない。

薫は当該歌を句宮に贈ることで、宮の浮舟に寄せる秘めた思いをあてこすってみせたわけだが、それとともに、浮舟を偲ぶ自分の思いを、唯一共有しうる人として、句宮を想起し心を通わせようとしたのである。死出の田長(郭公)は、その媒介として選ばれたものであった。

注

(1) 『源氏物語』の引用は、『新編日本古典文学全集』(以下「新編全集」と略称する)により、一部表記を改めた。他の諸注釈書に言及する場合は、以下の略称を用いる。「全書」(『日本古典全書』)、「大系」(『日本古典文学大系』)、「玉上評釈」(『玉上琢磨「源氏物語評釈」』)、「集成」(『新潮日本古典集成』)、「新大系」(『新日本古典文学大系』)。

(2) 『新編国歌大観』所収『水無瀬桜宮十五番歌合』(一番右・二・定家・「春恋」)には、初句「わすれめや」の形で収められている。

(かとうむつみ 本学教授)